

Delling Life of the Returnees from China (Part2) : About the Influence Brought by the Difference of Dwelling Culture and Daily Living Habits between China and Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9583

中国帰国者の住生活に関する研究 (第2報) 中国と日本における住文化や生活習慣の違いが もたらす影響について

趙 萍, 町田 玲子*

(奈良女子大学人間文化研究科, * 京都府立大学人間環境学部)

原稿受付平成 10 年 5 月 7 日; 原稿受理平成 11 年 1 月 25 日

Dwelling Life of the Returnees from China (Part 2)
About the Influence Brought by the Difference of Dwelling Culture and
Daily Living Habits between China and Japan

ZHAO Ping and Reiko MACHIDA*

Faculty of Human Culture, Nara Women's University, Nara 630-8263

** Faculty of Human Environment, Kyoto Prefectural University, Kyoto 606-8522*

This paper surveys the problems faced by the returnees from China, and how their life is affected by the difference and relationships of dwelling culture and daily living habits between China and Japan.

The results of our survey are as follows:

Handicapped in communicative power in Japanese, the returnees find it difficult to communicate with their relatives and neighbors, and take part in neighborhood meetings. The difference in dwelling culture and daily living habits have brought about a number of inconveniences on the part of the returnees; it is desired that the returnees strive to learn Japanese while adequate administrative arrangements be made to enable their learning and help close cultural gaps for both the returnees and the Japanese.

(Received May 7, 1998; Accepted in revised form January 25, 1999)

Keywords: daily living habit 生活習慣, dwelling culture 住文化, way of life 生活様式, comprehension to returnees 帰国者に対する理解, acquisition of Japanese 日本語の習得, association of neighborhood 近隣づきあい.

1. 緒 言

中国帰国者*¹は日本に引き揚げたから、言葉のギャップに悩まされ、様々な面においてカルチャーショックに見舞われながらも、積極的に日本における生活に馴染もうと努力している。ところが帰国者自身の力だけでは、解決できない問題も多く存在している(趙と町田 1998)*²。ゆえに、中国帰国者向け政策・施設の充実や日本社会における各方面からの理解ある支援が求められる。

第1報(趙と町田 1999)では、自治体における中

国帰国者向け政策および施設に関し、それらの充実度の実態と帰国者の住生活にもたらされた問題を中心に報告し、今後の課題について明らかにした。それらが帰国者の住生活にマイナス影響を与えていることを明らかにした。

本報では、中国帰国者の抱えている住生活上の諸問題と中国と日本における住文化や生活習慣の違いとの関連性について考察を行いたい。すなわち本報の目的

*¹ 中国帰国者は残留婦人、残留男子、残留孤児、子女(二世)のことを指す。本報では略して「婦人」「男子」「孤児」「子女」と称する。

*² 本論文では、日本語養成システムの充実、帰国者が集うための場所の設置、非常時において、地域の責任者が帰国者に情報を流すこと、周りの日本住民の理解などが帰国者自身の力では解決できない問題であることを明らかにしている。

は、両国における住文化や生活習慣の違いが帰国者の住生活にどのような影響を与えているかについての実態を明らかにし、問題解決の方向性について考察することである。

これらを明らかにすることは、中国帰国者の住生活水準向上の方向性を考える上での基礎的な資料になるものと思われる。一方、帰国者と一般の日本人との相互理解が図れ、問題解決やトラブルを防ぐことにも繋がるものと思われる。

2. 研究対象および研究方法

(1) 研究対象

中国帰国者は、かつて国策のもとに満州に行き、戦後直ちに日本に帰国できず(蘭 1994)、中日国交回復後日本に引き揚げた残留邦人およびその家族(配偶者、子供ならびに子供の家族)のことである(江畑等 1996)。中日国交回復後に帰国可能となった中国帰国者特有の歴史的背景ゆえに、本研究の調査対象世帯のほとんどは中国の東北部の出身者といえる(小川 1995)。中国人全体の生活様式や生活習慣と中国東北部に住む中国人のそれらとは多少の差はみられるが、日本人の生活様式と対比する場合、その差は誤差の範囲内であるといえる。したがって、帰国者層の中国における生活様式や生活習慣はほぼ類似していたと考えられる。

本研究の調査対象者は、自治体における公営住宅の優先入居枠および帰国者の日本語の習得・生活習慣の会得のために設けられた施設の有無という実態に基づき分類した、三つのグループに所属する自治体に居住する 157 世帯の中国帰国者である。彼らは年齢層(趙と町田 1997)や学歴、今までの体験においては相当の差が存在している。中国において長年生活してきたため、住文化的にも生活習慣も中国式である(江畑等 1996)。

(2) 研究方法

研究方法においては、第 1 報(趙と町田 1999)と同様に文献調査、質問紙調査およびヒアリング調査である(第 1 報参照)。

中国と日本は一衣帯水の隣国と言われるが、住様式や生活習慣においては異なる部分が多く存在している。中国においては「椅子座・ベッド就寝」であるのに対して、日本では「床座・床就寝」が主たる起居様式となっている。また、入浴習慣についても、乾燥した中国の北方において生活を営む中国人はとくにシャワー

に馴染んでいるが、日本人は高温多湿の気候風土ゆえに風呂の湯に浸かることを好む。さらに中国人は全体的に声大きい、住宅の壁厚が十分あるため、近隣迷惑になりにくく、声大きいことがむしろ評価されている。これと反対に、日本人は迷惑意識が強く、声大きいことは他人に迷惑であると考えられている。著者らはこれらの住文化や生活習慣の違いは、帰国者が日本における住生活に馴染む際どのような影響を与えているか、という視点からアンケートを組み立てた。質問内容は、寝具の管理、用便・入浴・食事・就寝・玄関出入り・接客の各行動様式や敷居に関するマナーなどに関するものである。

3 調査対象世帯の概要

本研究の調査対象世帯は、「孤児*3」および「子女**」世帯がとくに多く、帰国後 5 年以内が半数を占めている。核家族が約 8 割を占め、ほとんどの世帯が借家居住である(詳細は第 1 報参照)。

4. 結果および考察

(1) 生活様式

1) 現在の食事様式・就寝様式について

日本は「床座」と「椅子座」、「床就寝」と「ベッド就寝」という和洋折衷の起居様式であるが、中国の場合は日本と異なり「椅子座」、「ベッド就寝」という単一樣式である。住文化的には中国式である帰国者は引き揚げ後、どのような起居様式を採用しているかは次のとおりである。

食事様式については、不明を除く 57% (84/148) の帰国者は椅子座の食卓を、43% (64/148) の帰国者は床座の食卓を使用している。椅子座の食卓を使っている帰国者の中には、床座の食卓を兼用している者もあり、これらも含めて、床座の食卓を使用している帰国者に関して、床座への慣れ方についてたずねた。68% (63/93) は「慣れた」と答えている(図 1 参照)が、1 割弱 (4/59, 不明を除く) は慣れるのに 3 年以上かかっている。

寝床様式については、不明の 9 世帯を除いて、ベッド就寝は 20% (29/148)、床就寝は 80% (119/148) であった。日本独特の床就寝について、不明・非該当

*3 終戦時 13 歳未満の日本人子供であり、現在 50~60 代前半の年齢層に属している。

** 残留婦人・男子・孤児の二・三世であり、現在 10~50 代の幅広い年齢層となっている。

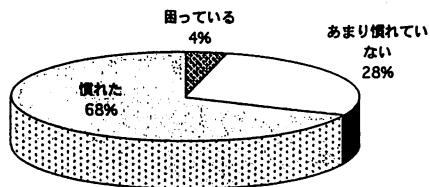


図1. 床座の食卓について
N=93 (椅子座の食卓兼用を含む).

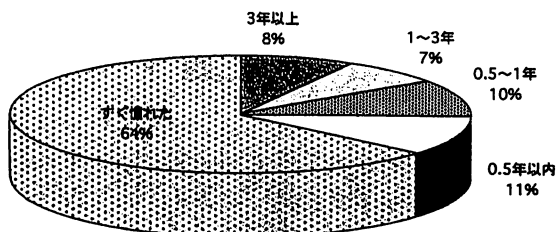


図2. 床就寝に慣れるのにかかった時間
N=89 (床就寝実践者、ただし不明を除く).

を除く75% (94/126) の帰国者は「慣れた」というが、「あまり慣れていない」、および「困っている」と答えた帰国者は25% (32/126) を占めている。なお「慣れた」と答えた帰国者のうち、1割弱は慣れるのに3年以上かかっている (図2参照)。

長年中国において椅子座の食卓を使い、ベッド就寝という起居様式で暮らしていたが、中・高年となった「婦人*5」「男子*6」「孤児」は現在、日本において床座の食卓を用い、床就寝の住生活を営む人が多い。床就寝が多い理由について、帰国者に対する直接訪問および電話によるヒアリング調査から、① 現住宅は空間的に狭いから、ベッドを置くと人の動くスペースが窮屈になる、② ベッド代が高いから、③ ベッドがない方が部屋全体がスッキリしているから、などの声が聞かれた。中・若年層は、「郷に入れば、郷に従え」という帰国者本人の心構えや自立指導員等周囲の指導により、比較的柔軟に対応しやすく、③ の理由が多いと思われる。一方高齢者層は、生活保護の受給者が多く、身体が衰えつつあることを考えると、① や② の理由が多いといえよう。

2) 布団の収納

中国人はベッドを使って就寝するので、布団などの

*5 終戦時13歳以上の日本人女性であり、現在60代以上の年齢層となっている。

*6 終戦時13歳以上の日本人男性であり、現在60代以上の年齢層となっている。

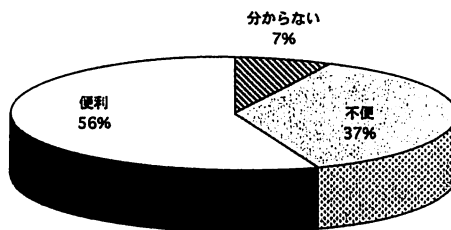


図3. 押入れについて (布団の収納)
N=145 (回答不明を除く).

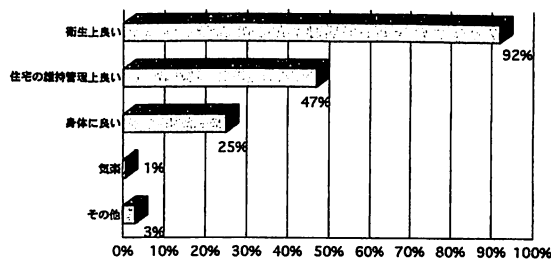


図4. 日本式の履床様式が合理的だと思う理由
N=146 (不明を除く).

寝具はそのままベッドに置く習慣を持っている。ところが日本の住宅は狭く、ベッドを置けないため床就寝様式をとらなければならず、寝具等は押入れに収納せざるを得なくなる。そのため、布団の出し入れに関して、37% (53/145) の帰国者は「不便」と思っている (図3参照)。なお後述の図7に示すように、住生活上「不便」と回答のあった各側面のうち、「布団の収納」についてはわずか13%に過ぎなかった。他の側面と相対的にみた場合、「布団の収納」の不便さは帰国者にとって深刻なものではないことがわかる。

3) 履床様式について

床面の維持管理、室内の清潔、足のくつろぎ等の理由で日本では、玄関において靴の履き替えをする履床様式がとられている。ところが中国では従来家の中においても、家の外においても同じ靴を履いて暮らしている。

「玄関で靴の履き替えをする」という日本式の履床様式について、不明を除く95% (146/154) の帰国者は「合理的」だと思ひ、4% (6/154) は「わからない」と答え、「不合理」だと思っている帰国者はわずか1.3% (2/154) となっている。「合理的」だと思ふ理由としては、「衛生上良い」「維持管理上良い」などが比較的高率である (図4参照)。「不合理」の理由には少数の帰国者からであるが、「慣れない」「面倒」

表1. 玄関および敷居のマナーについて

知っている か否か	玄関 (N=147)		敷居 (N=148)		知る必要性に 対する意識	玄関 (N=142)		敷居 (N=142)	
	実数	割合 (%)	実数	割合 (%)		実数	割合 (%)	実数	割合 (%)
知っている	94	64	60	41	必要がある	108	76	99	70
あまり知らない	33	23	46	31	知らなくてもよい	20	14	23	16
知らない	18	12	42	28	わからない	8	6	11	8
忘れた	2	1	0	0	全く必要がない	6	4	9	6

「冬は足が寒い」などが聞かれた。床を張り、畳を敷く日本の住宅には日本式の履床様式の方が合うと帰国者も意識していることがわかる。なお、近年都市に住む中国人は生活水準の向上に伴って、室内インテリアや住戸内の環境の快適さに目を向け始め、玄関において靴を履き替える風潮がみられるが、その影響もあって、「玄関で靴を履き替える」という日本式の履床様式に順応しやすかったものと思われる。

4) 日本式の入浴様式について

一家全員が同じ湯を使うという日本式の入浴様式に対して、不明を除いて、「抵抗なし平気」が43% (64/149)、「もう慣れた」が44% (66/149)、「抵抗がある」が10% (15/149)、「わからない」が3% (4/149) との回答が得られた。

ところで、図7 (後述) に示すように、「シャワーがない」ことを不便に思う層の割合は3割弱を占めているが、これには日本式の入浴様式に「抵抗がある」と思う帰国者層は当然含まれている。このような不便意識は、水の豊かではない中国では、「シャワーの方が省エネ」という意識が浸透していること、および女性はシャワー式への慣れがあることが影響しているものと思われる。

(2) 生活習慣について

1) 銭湯について

日本では庶民による銭湯使用の歴史が長いので、入浴時のマナーが習慣として身につけている。ところが中国では日本のような入浴マナーはない。

不明を除いて6割弱 (56%, 86/153) の帰国者は「銭湯に行ったことがある」、4割強 (44%, 67/153) は「銭湯に行ったことはない」と答えている。銭湯に行ったことのある帰国者のうち、「銭湯でトラブルがあった」と答えた帰国者は、13% (11/84) であった (非該当世帯および不明世帯を除く)。トラブルの理由は、「浴槽にタオルを持って入った」「立って洗い、隣人に湯を跳ね飛ばした」「浴槽の中で体を洗った」「大

きい声で喋った」などであった。これは日本における風呂に入る時のマナーを知らされていなかったためと考えられる。

2) 日本における玄関のマナー・敷居のマナーについて

玄関のマナー (脱いだ靴を後で履きやすいように、そろえて屋内向きに置く) に関しては、64% (94/147) の帰国者が知っている (表1参照)。また、「知る必要があるかどうか」について尋ねたところ、不明を除いて、76% (108/142) が「必要」と答えている。

敷居のマナー (敷居を踏んではいけない) に関しては不明を除いて、41% (60/148) の帰国者が知っており、「知る必要があるかどうか」については、「必要がある」が70% (99/142) である (表1参照)。

以上より敷居のマナーより玄関のマナーを知っている帰国者の割合が高いことがわかる。玄関は家の顔と言われ、昔から重視されたが、かつて「父親の頭」(山崎 1993)*7といわれた敷居は洋風化された現代住宅において徐々にその姿を消しつつある。そのため従来の一般の日本人においても敷居のマナーに関する意識は薄れてきたといえよう。こうした日本人の意識の変化が帰国者の意識にも反映していることがうかがわれる。玄関のマナーに対しても、敷居のマナーに対しても「知る必要がある」と答えた帰国者の割合が比較的高いのは、帰国者が日本における住生活に馴染もうとしているためと思われる。

3) 接客空間および接客習慣について

中国人は一般的に、ベッド就寝や扉による間仕切に

*7 山崎 (1993) は『住生活と住教育～これからの住まいと暮らし方を求めて～』p.197「家庭における住様式の伝承」において、「その敷居については日本には『玄関の敷居は父親の頭だから踏んではいけない (勝手口の敷居は母親の頭というところもある)』という格言がある。おそらく日本で育った50歳以上の人々の中には聞いたことがある人も多いだろう。」(p.197の15～17行目) と述べている。

みられるように家族間のプライバシー意識は従来の日本人家族に比べると高いと思われる。しかし来訪者など家族以外の者に対しては自分たちの生活を隠そうとする意識はほとんどない。主寝室が接客空間になったり、台所で来客ともども餃子をつくったりして、外部のものに対しては開放的である（王等 1994, 1996）。また、来客があると必ずお茶を出し、客が帰ろうとしたら玄関の外まで見送る。ところが日本人の場合は、よほど親しい間柄でない限り寝室などのプライベート空間には通さない。また、簡単な用件なら玄関で済ませてしまう。客を見送る時もわざわざ玄関から出なくてもマナーに反するとは思っていない。

以上のような接客習慣の違いについて、帰国者の意識を調べた結果は次のとおりである。

「中国と日本の習慣の違いで接客上不愉快があったか」については、不明を除いて、「なかった」56% (83/148), 「特になかった」34% (50/148), 「あった」10% (15/148) との回答が得られた。「不愉快」の理

由として、「見送る時玄関から出てこなかった」「お茶も出されなかった」等があげられている（図5参照）。「不愉快」の意識は近隣付き合いや、親戚付き合いを疎外することにも繋がる。また、自宅では「どこでお客様を接待しますか」については、46% (69/149) の帰国者は「とくに決まっていない」と答えている（図6参照）。つまり、5割弱は屋内のどこでもよい、と思っていることがわかる。このように、日本に引き揚げてからも多くの帰国者は接客習慣においてはなお中国式であることがわかる。したがって、近隣付き合いあるいは親戚付き合いが円滑であるためには、帰国者にとっても、一般の日本人にとっても、以上述べた中国と日本における習慣の違いを理解する必要があると思われる。

4) 住生活上の不便な点

住生活上の不便な点について、図7に示す項目から複数回答で選択させた結果は次のとおりである。「空間が狭い」が最も高率で次いで、「大きい声で話せな

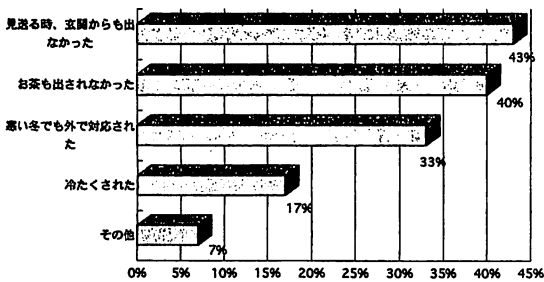


図5. 接客上不愉快と感じた理由
N=30 (不明を除く).

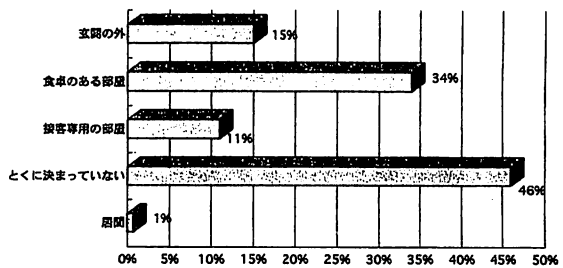


図6. 接客に使う空間
N=149 (不明を除く).

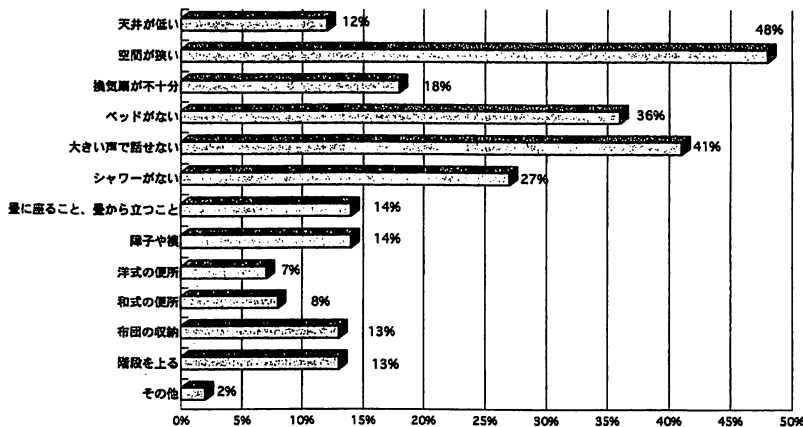


図7. 住生活上の不便な点
N=107 (不明を除く).

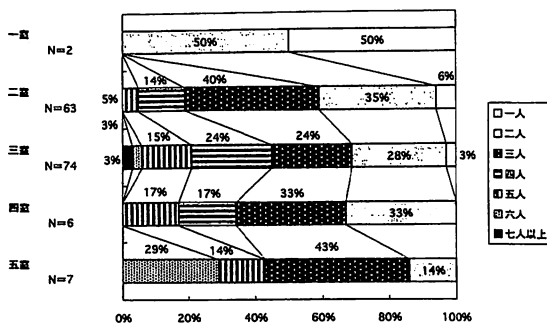


図8. 同居する家族人数 (1世帯あたりの居室数別)

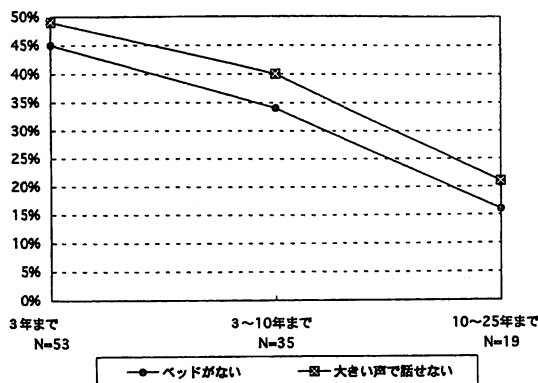


図9. 居住年数の増加に伴い、割合が低下する住生活上の不便な点

い「ベッドがない」「シャワーがない」の順である。

中国帰国者1世帯あたりの平均同居人数は3.1人、平均居室数は2.6居室である(図8参照)が、各室は4.5~6畳程度であり、家族のベッドを設置するほどのゆとりある広さではない。ヒアリング調査においても、帰国者から「空間が狭い」との切実な声が聞かれた。中国の住宅では、一般的には天井が高く、ベッド就寝も可能であることから、帰国者は日本における住宅が「空間的に狭い」と感じたものと思われる。

言葉が不自由で孤立的な立場にあり、かつ憂鬱な気持ちでいる帰国者ゆえに、住空間にゆとりがないことは、とくに「不便」を感じるものと思われる。水源は豊かではなく、乾燥している内陸の国において生活を営んできた中国東北部の帰国者は、入浴方法はシャワー方式をとっていた。ところが現在日本の公営住宅においては、シャワーがついていないため浴槽を使って入浴することになる。また畳敷ゆえ床座をとりやすい。以上述べたとおり、中日両国における住宅事情、生活習慣、就寝様式、入浴方法、起居様式などの違いは住

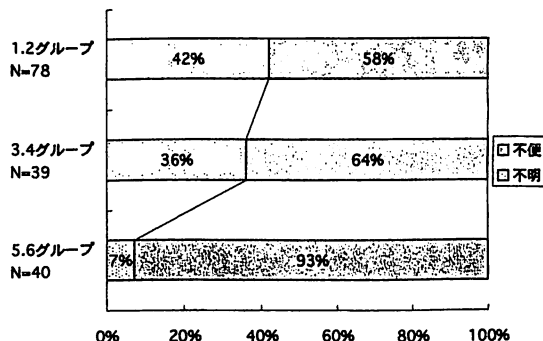


図10. 図7の各項目のいずれかを選択した帰国者世帯の割合(グループ別)

生活の各側面において、帰国者に不便意識を抱かせるものと思われる。

帰国後年数別に「不便」の回答をした帰国者の割合を見ると、日本に長く住むにつれて、「ベッドがない」「大きい声で話せない」などの側面において不便と感じている帰国者世帯の割合が低下する傾向がみられる(図9参照)。

政策と施設の充実度の高い順に自治体を3グループに分けた場合^{*8}、住生活上の不便意識を持つ世帯数は、1・2グループ、3・4グループ、5・6グループの順に高率であり(図10参照)、国および自治体における政策内容や施設状況の程度が住生活上の不便意識に影響していることがわかる。

(3) 親戚、近隣間、地域社会とのつながりについて

1) 近隣付き合い・親戚付き合いについて

「親しく付き合っている近隣があるか」については、不明を除いて、「ない」と答えた帰国者世帯は53%(80/152)を占めている。「ない」と答えた帰国者より「言葉が通じないから」84%(67/80)などの理由が聞かれた(図11参照)。

帰国者の立場別に見ると、近隣付き合いに最も積極的なのは「婦人」であることがわかった(図12参照)。また「近所に親しく付き合っている人がいない」と答えた「子女」は6割を占めているのが目立つ。これは

^{*8} 各自治体の中国帰国者関係部署に対する質問紙調査に基づき、住宅政策を横軸、施設の有無を縦軸に、マトリックスをつくり、回答のあった40の都府県を当て嵌めて6つに分類した。3グループとは1・2グループ(住宅政策、施設状態ともに比較的良好な自治体)、5・6グループ(住宅政策、施設状態が相対的に悪い自治体)、およびこれらの中間の3・4グループのことである。

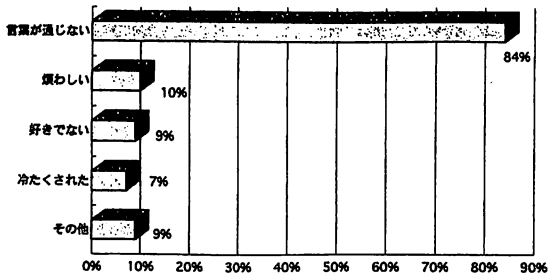


図 11. 近隣と親しく付き合わない理由

N=80 (不明を除く).

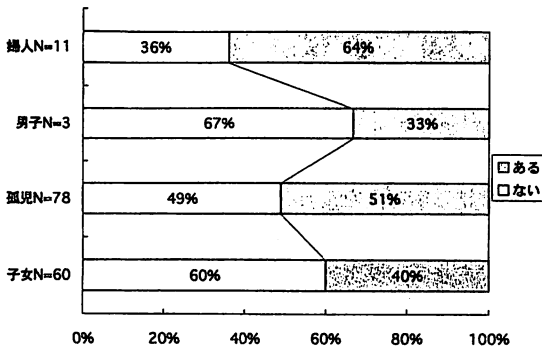


図 12. 親しく付き合っている近隣があるか否か（帰国者の立場別）

「子女」が日本の言葉や近隣付き合いの習慣にとくに不慣れなためと思われる。

離れたところに住む親戚との付き合いについては、35% (51/148) が「親しくないが形式上付き合っている」と答えている（図 13 参照）。「形式上付き合っている」、あるいは「ほとんど付き合っていない」と答えた帰国者にその理由を尋ねたところ、「言葉が通じない」が 65% (47/72)、「冷たくされた」が 32% (23/72) との回答が得られた。言葉のギャップがある上に、距離的に離れて住まざるを得ない中国帰国者には、親戚付き合いにもマイナス影響を与えていることがわかる。一方、帰国者に対する親戚の対応の仕方が問題として指摘できる。中国帰国者の生活様式は文化的には中国式であり、生活習慣においても中国人そのものであることは前述したとおりである（4-(1)-1～4）、4-(2)-4）。中国においては、人々は近隣関係を大切にし、親戚間のつながりも強い（川畑等 1986；千石等 1992）。ゆえに、日本に引き揚げてからも中国における親戚関係と同じような親戚関係を求めるが、日本人は淡々と対応するため帰国者は戸惑い、冷たくさ

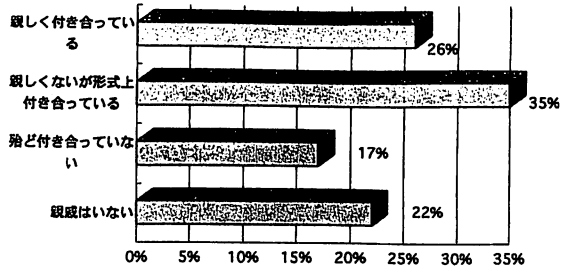


図 13. 離れた所に住む親戚との付き合い

N=148 (不明を除く).

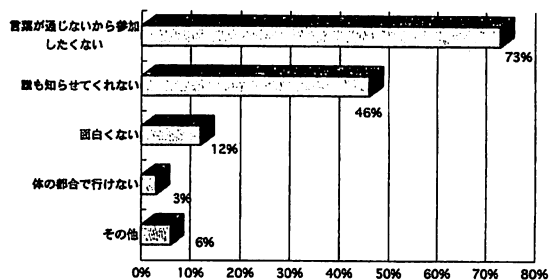


図 14. 町内会が組織する集會に参加しない理由

N=67 (不明を除く).

れたと思い、親戚付き合いをしなくなる。無論、財産分与とか、貧しい者への蔑視などで、帰国者は冷たくされたケースが少なくないということも事実である。

2) 町内会が組織する集會（地藏盆などの行事や団地における草刈り・大掃除等の集団行動）について

不明を除いて、5割強（82/149）の帰国者は集會に参加し、4割強（67/149）の帰国者は参加しないことがわかった。

参加する理由として、「日本人の習慣を理解することができるから」44%（35/79）、「義務だから」41%（32/79）、「連絡と関係を促すことができるから」38%（30/79）などがあげられている。なお、参加しない理由として、「言葉が通じないから」73%（49/67）、「誰も知らせてくれないから」46%（31/67）などがあげられている（図 14 参照）。一方、6割弱（35/60）の「子女」がこのような集會に参加していないのが特徴的である（図 15 参照）。

町内会が組織する集會に参加することは中国帰国者の近隣・地域との交流にも、住生活の向上にも有益であると思われる。しかし帰国者は言葉のギャップや、会合があるという知らせが帰国者のところに届かない

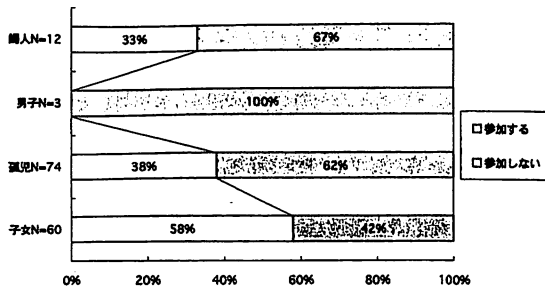


図 15. 町内会が組織する集会への参加状況 (帰国者の立場別)

ような閉鎖的な立場にいることにより、結果的には参加しないことになっているものと思われる。また、体には日本人の血が流れているが、文化的にも習慣上も中国人その者である「子女」たちにとって、町内会や町内会が組織する集会に対する意識が不十分であるといえる。地域の人達と帰国者との仲が睦まじくなるように、相互の理解や、自治体や地域組織の配慮、および帰国者本人の地域に馴染もうという積極的な姿勢が必要であろう。競争の激しい現代の日本社会においては、人々はますます忙しくなってきたため、サービス業界も高レベルのサービスを提供するようになった。その結果、人々は他人を頼らなくても生活していけるようになったためか、人と人との触れ合いが少なくなり、ついに「個別化」等の問題が社会問題として提起された。本来言葉のギャップにより情報源を閉ざされた帰国者にとっては、こうした環境のもとで、生活していくのは容易ではないことが推測できる。ゆえに、言葉のギャップがあるから町内会が組織する集会に参加しない、町内会の組織する集会に参加しないからますます閉鎖的になり、言葉も上達しない、といった悪循環をなくするためには、帰国者と地域の人達の双方の努力が求められると思われる。

5. 要 約

本報では、中国と日本における住文化や生活習慣の違いが帰国者の住生活にもたらす影響を明らかにした。結果は下記の諸点に要約できる。

(1) 言葉が不自由であることは、帰国者が中国と日本における住文化や生活習慣の違いを理解することを妨げ、帰国者の住生活ひいては生活全般に影響を及ぼしていることが明らかになった。

(2) 中国と日本の住文化や生活習慣の違いにより、帰国者は①「空間が狭い」「大きい声で話せない」

「ベッドがない」「シャワーがない」などの諸側面において不便と感じている。帰国後の年数の増加に伴い慣れる面（「大きい声で話せない」「ベッドがない」）もあるが、そうでない場合もある。

(3) 接客習慣、近隣付き合いなどの側面においても不便と感じている。近隣付き合いや親戚付き合いの中で、相互理解が足りないため「冷遇された」と思ったケースもある。日本においては、ごく普通で一般的な接客の仕方や親戚の対応の仕方であるにもかかわらず、習慣の違いにより、帰国者は過敏に反応し冷たくされたと思うこともある。ゆえに、近隣や親戚の対応の仕方が問題として指摘できる。

中国帰国者と近隣、あるいは親戚との付き合いが睦まじくなるように、また誤解がさけられるように、中日両国における住文化や生活習慣の違いを双方が知り、お互いに理解し合うように努力しなければならない。行政側としてもその方策を検討すべきであると思われる。

(4) 帰国者が町内会に参加しない理由の一つとして、町内会が組織する集会に関する知らせが帰国者に伝わらないことがあげられている。ゆえに、地域や町内会の責任者として配慮すべき点の不十分であることが問題として指摘できる。

以上述べた内容をまとめると、次の3点が今後の課題としてあげられる。

① 言葉の問題は帰国者の住生活ひいては生活全般に波及している。したがって帰国者の根性のある日本語の習得姿勢、およびそれを可能にさせるための施設計画などの方法について。

② 中国と日本における住文化や生活習慣の違い、および帰国者の具体的な事情を配慮した上での住まい方アドバイスの入手方法について。

③ 帰国者を閉鎖的な立場から脱出させるためには、地域や町内会の責任者からの理解と配慮等が欠かせない。地域や町内会の責任者に対する意識啓発について。

引用文献

- 蘭 信三 (1994) 『「満州移民」の歴史社会学』, 行路社, 京都
 江畑敬介, 曾 文星, 箕口雅博 (1996) 『「移住と適応」中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』, 日本評論社, 東京
 川畑美樹, 斎藤千恵, 鈴木智之, 鄭 曉恵, 王 曼琴, 井口博充, 儘田 徹 (1986) 中国帰国者における「家族」, 第59回日本社会学会発表レジュメ, 30-31

中国帰国者の住生活に関する研究（第2報）

- 小川津根子（1995）『祖国よ「中国残留婦人」の半世紀』，岩波新書，岩波書店，東京
- 千石 保，丁 謙（1992）『中国人の価値観』，サイマル出版社，東京
- 王 青，高橋鷹志，鈴木 毅（1994）中国遼寧省審陽現代単元式住宅における「接客」行為への考察，日本建築学会大会学術講演梗概集，51-52
- 王 青，横山ゆりか，鈴木 毅，高橋鷹志（1996）天津市単元式住宅における住様式に関する研究～中国都市住宅における住様式の研究 その1～，日本建築学会計画系論文集，第479号，77-85
- 山崎古都子（1993）家庭における住様式の伝承『住生活と住教育～これからの住まいと暮らし方を求めて～』（奈良女大住生活学研究室編），彰国社，東京，197
- 趙 萍，町田玲子（1997）中国帰国者の住生活に関する研究～国及び自治体における政策，日本家政学会関西支部
- 趙 萍，町田玲子（1998）中国帰国者の住生活に関する研究—阪神・淡路大震災の被災地の居住者の場合：京都在住者と比較して—，家政誌，**49**，811-820
- 趙 萍，町田玲子（1999）中国帰国者の住生活に関する研究（第1報）自治体における支援対策・施設がもたらす影響について，家政誌，**50**，509-520